

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：32517

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 年度～2011 年度

課題番号：21730641

研究課題名（和文）シュタイナーの人間観と芸術論を基盤とする言語教育論の解明とその実態に関する研究

研究課題名（英文）A study on clarification of language education theory based on Steiner's recognition of human being and art theory

研究代表者

柴山 英樹（SHIBAYAMA HIDEKI）

聖徳大学・児童学部・准教授

研究者番号：60439007

研究成果の概要（和文）：シュタイナーの人間観および芸術論に基づいて、彼の世界認識のあり方や言語における芸術性に関する主張を明らかにした。しかしそれは、言語の構造上の仕組みや特質に着目したものであり、言語と世界の認識がどのように関連しているのか、言及したものではなかった。そこで、フリッツ・マウトナーの言語批判論を参照枠としながら、シュタイナーは、言語で世界を固定するのではなく、生き生きとした動的な言語表現を用いることで、世界を有機的に理解することができる点を示唆したのであった。

研究成果の概要（英文）：This study was made to clarify of the Steiner's ways of understanding an outer world and his language education. However that isn't how we know an outer world by language. Then, in comparing Steiner's theory of language Flitz Mauthner's theory, Steiner suggested that an outer world was not fixed in language but it was able to be an organic way to an understanding of an outer world by language whose form is active and mobile.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：シュタイナー、言語教育、物語り論、言語と認識

1. 研究開始当初の背景

研究開始前から、ルドルフ・シュタイナーの理論を主に研究を進めてきた。従来のシュタイナーの教育に関する研究は、シュタイナーの発達段階論の分析とその教育方法の関連を解明しようとするものが多く、これらの考察に基づいてシュタイナー教育の日本的展開の可能性を示唆してきた（広瀬俊雄『シュタイナーの人間観と教育方法』ミネルヴァ書房、1988 や広瀬俊雄

『教育力としての言語—シュタイナー教育の原点—』勁草書房、2002 など）。しかし本研究は、「シュタイナー教育」に特化するのではなく、これからの日本の教育を考えるために、シュタイナーの教育方法の思想的基盤と思考法を解明することを目指すものである。

なお、研究を開始する以前から、シュタイナーの教育思想に関する研究に関して、パウハウスの教師であったカンディンスキー、ク

レーなどの同時代における影響関係を考慮しながら研究を行ってきた。そのひとつがシュタイナーの音楽教育・美術教育等に着目し、芸術活動による身体と世界のかかわりを通じた教育に関する研究である。この研究を基盤に、言語教育論の解明を試みることであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、シュタイナーの言語教育論の特徴を明らかにするとともに、この視点を基盤としながら、現在のシュタイナー学校における言語教育の実態を明らかにしていくことである。そのためには、シュタイナーの言語教育論を支える全体論的な人間観を形成史から解明し、それに基づいて彼の芸術論の意味内実を明らかにしていくことが不可欠である。それゆえ本研究においては、シュタイナーの教育思想を支える全体論的な人間観を歴史的な文脈から解明し、それに基づいて彼の教育思想や芸術論の意味内実を明らかにしていくことを研究課題として設定した。

なお、研究の展開に際しては、留意すべきは、思想史的背景を踏まえつつ、シュタイナーの言語教育論の特徴を明らかにしていくことである。そのため、この言語教育論に関する考察は、実践的な考察段階における重要な考察視点となると考えた。

3. 研究の方法

(1) 教育思想史的考察

① 形成史的考察

シュタイナーの思想形成について、19世紀自然科学などの同時代の文脈を考慮しながら、彼の人間観の特徴を明らかにした。

彼の思想形成を考察していくことで、彼が19世紀自然科学に非常に精通しており、その人間観は自然科学的な見解を基盤とした上に成立している新しい科学観に基づくものであることを指摘した。

② 思想史的考察

シュタイナーの芸術論および言語教育論を読み解いていく際に、同時代の思想家の教育思想を参照枠として設け、それらとの異同を考察することにより、同時代的な関心とその異なる現われ方を明確にし、その内実と特色を明らかにしていくという方法をとった。

(2) 歴史物語り論に基づく研究

シュタイナーが主張する教師の語りのあり方を考察する際に、彼の試みを「物語り行為」と位置づけ、大森荘蔵の「過去の言語的制約」やアーサー・ダントの「物語り文」、野家啓一の「歴史の物語り論」などの「歴史の物語り論」の視点から検討した。

(3) ドイツ・イギリス・日本における言語教育の実態調査

ドイツ・イギリス・日本におけるシュタイナー学校の言語教育のカリキュラム及び授業方法を明らかにするために、現地で資料収集やインタビュー調査を行った。

① ドイツのシュタイナー学校及びシュタイナー学校教員養成校（平成23年2月20日～平成23年3月1日）

② NPO 法人東京賢治の学校自由ヴァルドルフシューレ（平成23年7月2日）

③ 学校法人シュタイナー学園・初等部・中等部、NPO 法人藤野シュタイナー高等学園（平成23年9月3日）

④ イギリスのシュタイナー学校の教員養成施設のアンドリュー・ウォルパート氏へのインタビュー（平成23年9月4日）

⑤ イギリスのシュタイナー学校及びシュタイナー学校教員養成校（平成24年1月24日～平成24年1月30日）

⑥ NPO 法人横浜シュタイナー学園（平成23年3月22日）

4. 研究成果

(1) シュタイナーの人間観および芸術論に基づく世界の認識のあり方について

先行研究においては、シュタイナーの人間観及び教育方法の全体像を体系化することに成功したものの、その一方で、シュタイナーの人間観及び教育方法における思想的背景にある科学観については十分に検討されてこなかった。また、芸術論に関する考察に関しても、同時代の認識論の文脈から切り離され、その実践的方法について検討がされてきた。そこで本研究では、シュタイナーの科学観に着目しつつ、世界の認識のあり方どのように捉えていたのかを明らかにした。

① シュタイナーの人間観について

シュタイナーは個別的な部分を寄せ集めて普遍的な全体を構築し、その普遍的な法則を個別的な部分に還元しようとする、要素還元主義的な自然科学に批判的であった。なぜならば、有機体は生きた全体であり、個別的な部分をいくら寄せ集めてもその本質を認識することはできないからである。そこでシュタイナーは、ゲーテの自然科学的方法が、自然の全体を包括する何かを問い続けて、個別的な事象の中に普遍的な「全体」を常に見出すものであると捉え、その手法を高く評価し自らの思考法としてさらに展開していったのである（図書①）。

これまで神秘主義と解釈されてきたシュタイナーの人間観について、19世紀の機械論的・要素主義的な生理学や心理学との対峙の仕方に着目し、ゲーテ的認識方法を基盤としながら、ブレンターノの心理学やヘッケルの進化論、宇宙論的かつオカルト的視点などを取り入れていったのである（図書①）。

②シュタイナーの世界の認識のあり方

シュタイナーは、概念や数式を用いた表面的な事物の観察や物理的な実験では自然現象そのものを理解することはできないとした。つまり、彼はゲーテが主張したような対象に即した身体的行為を通して、自然の根本現象を捉えるべきだと考えたのである（論文①）。

③芸術活動との関連

シュタイナーはゲーテの自然科学を拠り所にしつつ、芸術行為のあり方を考察することにより、認識行為と芸術行為の関連性を示すことができた。シュタイナーが展開した「フォルメン線描」や「にじみ絵」などの芸術活動について、身体を生き生きと変化し続ける動的な状態に形成していくための身体的な構えを作り出し、自然の色や形の複雑で豊かな表情やその生命力を生き生きと感じ取ることを試みたものとして捉えることができる（論文①）。

(2) シュタイナーにおける言語の芸術性

先行研究（広瀬俊雄『教育力としての言語—シュタイナー教育の原点』勁草書房、2002や広瀬綾子『演劇教育の理論と実践の研究—自由ヴァルドルフ学校の演劇教育』東信堂、2011など）においては、言語の芸術性に関する考察はあるものの、その思想的背景にまで言及したものではない。そこで本研究では、言語の芸術性の思想的背景について明らかにした（図書①、論文①）。

①言語の芸術性

シュタイナーにとって言語とは、単なるコミュニケーションの道具ではなく、芸術的で固有な価値を有するものだとされる。なぜならば、「母音」は心的な生命を表現している＜音楽的なもの＞であり、「子音」は事物の把握から生成し、事物の外なる形態を模造する＜彫塑的・造形的なもの＞だからである。

②芸術における二側面

シュタイナーは同時代人であるニーチェの枠組みを用いながら、「デュオニュソスの要素」を持つ＜音楽的なもの＞と「アポロンの要素」を持つ＜彫塑的・造形的なもの＞の二つの観点から捉えている。

③言語と芸術の関係

シュタイナーが言語を「母音」と「子音」に分けて捉え、前者は＜音楽的なもの＞を含み、後者は＜造形的・彫塑的なもの＞を含むと考えており、二つの芸術的要素が言語の中に内在していると捉えていた。

ゲーテの「対極性」と「高昇」の原理を援用しながら、両者が統合すると考えた。このような観点に依拠することによって、彫塑的・造形的な教育活動と音楽的な教育活動が言語教育において統合されると見做すことができたのである。

(3) 言語と世界の連関

先行研究では、シュタイナーにおける言語と世界の連関まで踏み込んだ論究が十分に展開されているとはいえない。そこで本研究では、このような観点から考察を行なった。

① 語構造と世界の連関

シュタイナーによると、母音が、音楽的であるのは、世界とのかかわりにおける内的な感情を表現したものであるからとされ、子音が造形的であるのは、自然現象における造形的活動を模倣したものであるからとされる。つまり、彼が強調した母音と子音における芸術性という視点は、人間の意識と世界とのかかわりを視野に入れたものであった。

また、彼はこのような捉え方に基づいて、世界に対する認識のあり方の違いを母音の感情表現の違いから読み取るべきだとして、言語表現の違いからそれぞれの民族の特性や世界観を把握しようと試みたのである。

②身体と言語音の関係性

シュタイナーは、ゲーテの自然科学の認識論を動植物に限定せず、人間の身体にまで適用することによって、「歯音」が「頭部」と、「唇音」が「胸部」と、「口蓋音」が「四肢」と関連していることを指摘した。彼は身体と言語音の関連を包括的に捉えることで、身体の諸組織が言語の発声と密接に関連していると解釈することができたのである。

③言語の創造性と教育

シュタイナーは、言葉の内実が論理的に理解できる類のものではないでないとし、オイリュトミーや文字絵などの身体的活動を通じて、子どもが言語と改めて出会い直し、言語を創造していく過程を追体験していくと捉えたのである。

④言語による認識という課題

しかし、上記の観点は、言語の構造上の仕組みとその特質に着眼した主張であり、言語と世界の認識とがどのように関連しているのかについて論証したものではない。そこで本研究においても、言語の構造上の仕組みに関する観点だけではなく、言語による世界の認識についてはどのように捉えていたのかという観点から検討することを試みた。

(4) シュタイナーにおける言語と世界の認識の関係

シュタイナーにおける言語と世界の認識の関係について、同時代のフリッツ・マウトナーの言語批判への応答として言語による世界の認識の可能性について言及している点に着目し、同時代的な関心とその異なる現われ方を明確にしなが、その内実と特色を明らかにした（論文①）。

①シュタイナーとマウトナーの共通性と差異

言語と現実世界には何ら連関がないとして、言語からの解放による世界の認識を目指

したマウトナーと、言語と現実世界の連関を探究し、言語の再生による世界の認識のあり方を試みたシュタイナーとの違いが明らかとなった。シュタイナーは、言語における芸術性に着目しながら、先に述べた言語と世界の連関を見出すことによって、子ども自身が言語の担い手となって言語の創造性を追体験することを試みたのである。

また、言語批判を徹底し、「沈黙」を促すマウトナーであるが、言語で表現しがたいものを、遠くからであるが指し示すことができるものとして、「詩的言語」を高く評価する。マウトナーは、詩人としてのゲーテを高く評価する。それに対して、シュタイナーは自然科学者ゲーテと詩人ゲーテをともに評価し、科学と芸術の根源が同一であり、それぞれ異なる側面や表現方法を持っているにすぎないと指摘する。ゲーテの位置づけが両者によって大きく異なっている点が明らかとなった。

②生き生きとした現象を言語で語ること

シュタイナーとマウトナーは生き生きとした自然の現象を言語でいかに表現するかという矛盾に満ちた問題に直面した。マウトナーが語りえぬものについては語らないとする「沈黙」への要請を求めたのに対して、シュタイナーはゲーテの思想を手がかりに、生きたものを公式化や数式化によって死んだものへと転換することなく、不断に変化する柔軟な概念によって、生き生きとした現象を語るべきであるとした。

(5)シュタイナーの歴史教育における教師の物語り行為の特徴と課題

教師の語りの具体的な実践のあり方について明らかにするために、歴史教育における教師の物語り行為について検討を行なった。なお、先行研究（池内耕作「自由ヴァルドルフ学校における歴史教育—その成立根拠と目的を中心に—」『東北教育学会研究紀要』第3号、2000）では、シュタイナー教育における歴史教育の成立根拠とされる「内的欲求」と歴史教育の目的について指摘がなされているが、教師の物語り行為に焦点が当てられた研究はなく、本研究によって、教師の物語り行為の特徴と課題が明らかとなった（論文②）。

①歴史に参入すること

シュタイナーは歴史的事実を定義づけて暗記させる方法を批判し、歴史的出来事を空間的・時間的に物語り、登場人物や出来事の様子を特徴づけて物語り、子どもが歴史に参入できるようにすべきであるとした。

②教師の物語り行為の特徴

教師は自分の学んできた歴史を想起しながら語ればよいのではなく、教師自らが歴史的過去について探究し、自分自身で語りなおす必要がある。それだけではなく、ここで用いられる物語り行為の製作的性質から、自分の語りのあり方そのものを認識することが求められる。その

ため、教師は自分自身がどのようなポジションから語っているのか、どのような解釈によるものなのか、一般的な法則性を暗示させるような語りになっていないかなどを意識しながら語ることが求められるのである。このように、教師の物語り行為には、歴史に関する語りそのものを探究的に検討する複眼的な教材研究が不可欠なのである。

③物語り行為の相対化の試み

「歴史の物語り論」の視点から検討すると、シュタイナーの物語り行為には検証すべき課題が残っている。それは、教師の語りが特権性を持っており、子どもがその物語りを絶対化してしまう危険性があるという点である。とりわけ、評価の異なる他者による多様な語りが存在する今日においては、語りそのものの検討が必要であり、語りそのものを相対化する場を設ける必要がある。うまく自己の物語りに組み込むことができない別の物語りを生きる他者の存在と出会い、自己の物語りを常に編み直し続ける姿勢を形成していくために、教師と生徒がともに歴史の物語り行為を検証する作業を行っていく必要があると考える。

(6) 言語や文化を考慮した言語教育

先行研究においては、シュタイナーの教育思想の普遍性を強調するものが多く、言語や文化の違いが十分に考慮されたとは言い難い。とりわけ、シュタイナーの言語教育に関する考察の主たる射程が、ドイツ語圏であったことを踏まえると、英語や日本語の特徴を考慮した言語教育のあり方を考察していく必要がある。

そこで、イギリス・アメリカ・日本におけるシュタイナー学校の言語教育に関して、文献調査・実地調査・インタビュー調査による実態調査を行い、現状と課題を考察した。

①言語や文化の違い

シュタイナーの言語教育思想は、詩人ゲーテにおける科学と芸術の根源の同一性という思想を基盤に、ドイツ語圏の教育実践のために構想されたものであった。それゆえに、英語圏や日本語圏という異なる言語や文化において、シュタイナーの言語教育思想を即座に展開することはできない。

②英米における言語教育のカリキュラムとその思想的背景

イギリス・アメリカのシュタイナー学校高等部のカリキュラムの中には、英語の進化や詩の芸術的要素など、詩がどのような経験をもたらすのかについて議論しつつ、言語と意識の進化について、歴史的に考察することなどが示唆されている。また、コールリッジなどの詩を体験しながら、想像力による切り離された世界との再結合を試みるのが青

年期の生徒には必要であるとされている。

このようなカリキュラムの背景として、イギリスの文学者であるオーエン・バーフィールドが展開した言語思想の影響などが挙げられる。彼は、人間の意識の進化の記録が言語の歴史から解明できると考え、シュタイナーの進化論(図書①)と言語思想などの影響を受けながら、英語の変化に着目した研究を展開した。また、バーフィールドは、シュタイナーがゲーテの思想に見出した物質と精神の参与を、コールリッジが見出した「想像力」の概念に見出し、物質と精神の間のつなぐ想像力の役割を強調したのである。

③言語や文学に関する教材研究の必要性

芸術活動などに関しては、異なる文化圏においてもシュタイナーの教育思想をそのまま実践する場合が少なくない。しかし、シュタイナーの言語教育思想を実践する場合、単にシュタイナーの思考様式を適合させるのではなく、その言語や文化に関する独自の研究視点に基づいて、言語の性質や文学教材の本質を洞察することが不可欠なのである。

④日本における音声教育の課題

シュタイナーは言語を「母音」と「子音」に分けて捉え、異なる教育方法を展開したが、日本語では、「母音」と「子音」の両者の区別を意識されることが少ない。

そこで、日本語の指導の場合、「母音」の響きが感情を引き出し、世界と一体化するために、自他の区別がつけにくいという特徴を踏まえて、言語造型やオイリュトミーの子音の動きを学びながら、「子音」を意識して発音し、世界と距離をとりながら、個を形成していく側面を重視する実践が試みられている。

⑤日本における文字教育の課題

日本では、漢字やひらがなというアルファベットとは大きく異なる表現形態を用いている。そこで、日本における文字教育の場面では、シュタイナーが主張した造形的・絵画的方法を重視し、通常行われる「ひらがなから漢字へ」という展開ではなく、「漢字からひらがなへ」という展開を行っている場合もある。そこでは、ひらがなの成り立ちを深く考察し、独自の物語を創作しながら、授業を展開していた。

しかし、シュタイナー学校の場合、教師独自の教材研究を重視しているため、統一の教育方法は存在しない。各教師の教材開発のあり方を共有し、日本における音声教育や文字教育のあり方について省察していく必要があることが明らかとなった。

(7) 今後の課題

シュタイナーの教育実践の多くが、彼の言説に基づいて展開されているが、文学教材等に関する教材選択の基準や教材研究の視点、カリキュラム編成のあり方がいかなる思想に基づくものであるか、明確でないものも少なくない。そ

れぞれの文化的・歴史的な文脈に基づいて教材研究等が行われているため、今後はこれらの点を整理し、明らかにしていきたい。

また、シュタイナー自身が書物を「読むこと」に関して多くを言及していないため、この点に着目した研究がほとんどない。しかし、「読むこと」は、人間形成において不可欠であり、今日のシュタイナー学校においてもこの点を考慮した展開がなされている。そこで、現在のシュタイナー学校におけるカリキュラムを調査し、「読むこと」の位置づけを明らかにする必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 柴山英樹、シュタイナーにおける言語と世界の認識の関係、近代教育フォーラム、査読無、第20号、2011、188-191
- ② 柴山英樹、歴史教育における教師の物語り行為の特徴と課題—シュタイナーの歴史教育論を手かりに一、聖徳大学研究紀要、査読有、第21号、2011、39-46

[学会発表] (計2件)

- ① 柴山英樹、シュタイナーにおける言語の芸術性と世界認識あり方、教育思想史学会第20回大会、2010年9月20日、日本大学
- ② 柴山英樹、物語る行為としての歴史知—一語り部としての教師の役割—、日本教育方法学会第45回大会、2009年9月26日、香川大学

[図書] (計1件)

- ① 柴山英樹、勁草書房、シュタイナーの教育思想—その人間観と芸術論、2011、320

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴山 英樹 (SHIBAYAMA HIDEKI)

聖徳大学・児童学部・准教授

研究者番号：60439007

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし